一色城跡（本発掘調査B）

いっしきじょうあと

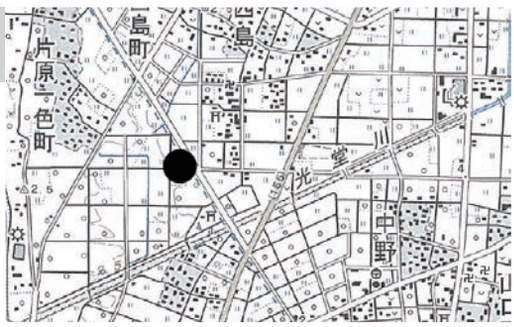
所　在　地　稲沢市西島本町地内
（北緯35度15分00秒 東経136度44分58秒）

調査理由　県道給父稲沢線道路改良工事

調査期間　令和2年11月～令和3年2月

調査面積　1,350㎡

担　当　者　池本正明・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「清洲」）

調査の経過　調査は、愛知県建設局道路建設課から愛知県県民文化局を通じた委託事業として行なった。今年度は、昨年度の発掘調査区（19A～D区）から尾張水道みち（旧・尾張サイクリングロード）を挟んだ西側で、南北幅約16～18mで東西に最大87mの調査対象地を、3調査区（20A～C区）に分割して調査を進めた。

立地と環境　遺跡は、尾張平野北西部の沖積低地に所在し、東に三宅川、西に日光川が流れる氾濫原（自然堤防帯）に立地する。昨年度の調査区は、南北に長い微高地（自然堤防）を東西方向に横断する形で設定され、その頂部から南東縁にかけて古墳時代～奈良時代の集落が広がり、その後中世になると、微高地全体が集落域として区画溝が縦横に巡る景観へ変化したことが明らかにされた。なお、その西縁は古墳時代前期前半まで河道となっていたことが判明し、急速に陸地化したとみられる。一方で今年度の調査区は、南方約100mに位置する神明社付近から延びる微高地の北端にあると考えられる。神明社周辺では稲沢市教育委員会が昭和58年度に発掘調査を行い、弥生土器や灰釉陶器・山茶碗類が多数出土している（一色城跡下層遺跡）。

調査研究史　一色城跡については、江戸時代の史料に記載がある。古くは『寛文村々覚書』（1672年完成）に「古城跡壱ヶ所　先年橋本伊賀守居城之由、今ハ畑に成」とあり、橋本氏の居城であったことが判明する。さらに『張州府誌』（1752年完成）・『蓬州旧勝録』（1779年自序）・『尾張徇行記』（1822年完成）にも、「一色城」が片原一色村に所在することが記されている。また、近世の片原一色村の村絵図には現在の神明社から北側に古城跡が記されており、おおよその位置が推測できるが、その具体的な位置や規模については、近年になって明治時代の地籍図を用いて検討されるようになるまで不明であった。

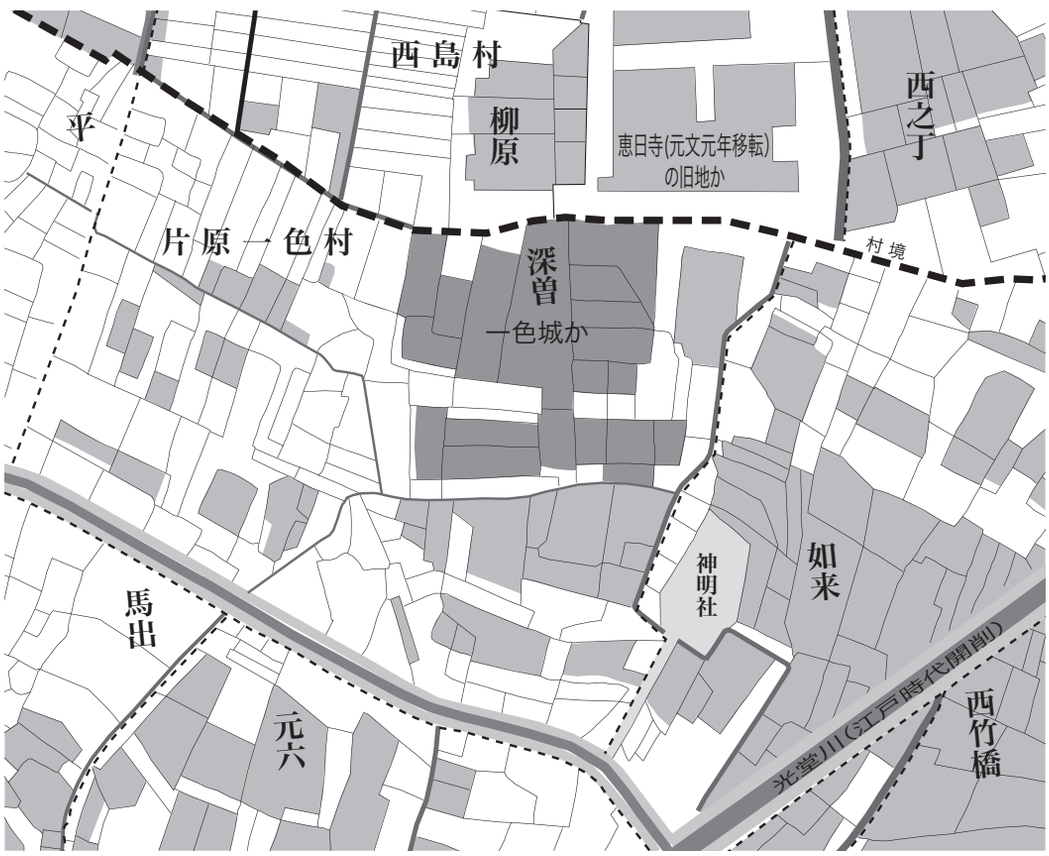
昨年度の発掘調査では、その調査区西端で幅約13m、深さ約1.5mの南北に延びる堀跡と、それが西方向へ屈曲する箇所も検出された。当該遺構の底面付近からは漆椀や若干の木片が出土している。漆椀は、炭素年代測定の結果も交えると16世紀代のものであり、堀跡が戦国時代に機能していた可能性がきわめて高い。これと地籍図による一色城跡の想定を合わせ、主郭東側の堀（東堀）と曲輪の北東隅に相当すると評価された。

一方、城主である橋本氏については、織田信長に鉄砲射撃を教授し、永禄元年（1559年）の岩倉城攻めに活躍した橋本一巴が『信長公記』に登場するが、一巴を含む8代が居たとされている（『片原一色村誌』）。橋本氏はやがて肥後の大名加藤氏に仕えてこの地を去り、通説では元和元年に廃城とされたとされている。

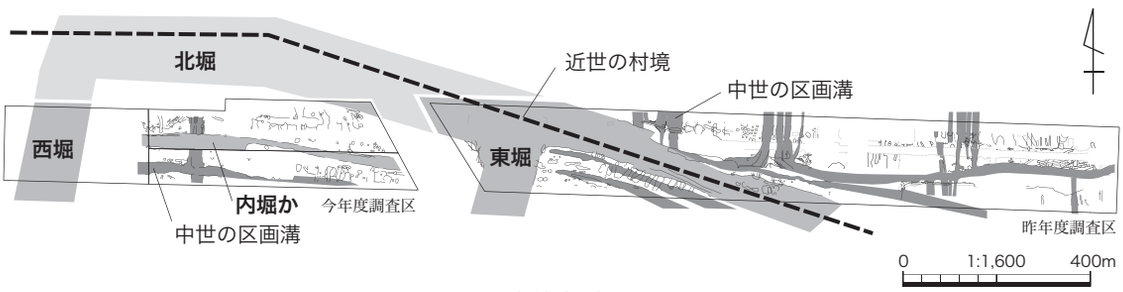
調査の概要　調査対象地は、昨年度検出した曲輪の北東角からさらに西側、主郭北縁部に相当すると予想された。発掘調査は20C区から着手し、同A区、同B区の順に進めた。

基本土層は、明黄褐色系砂質シルトを基盤層とし、その上面（検2面）で古墳時代前期～古代の遺構を検出した。これを覆う包含層は暗褐色系シルトで、にその上位に硬くしまった黄褐色シルトが最大で約0.6mの厚さで覆っている。当該層は山茶碗の小片を含んでいることやブロック状のシルトが混入するので、中世の整地層と思われる。当該層は概ね上下2層に区分され、上層が一色城の築城に伴うものと考えられ、その上面で大窯期の陶器が出土する遺構を検出した（検1面）。ただし、近世以降の削平が激しく、中世の整地層は今年度調査区の南東部のみで残存しており、それ以外では戦国時代の遺構も基盤層上面での検出となっている。

古 墳 時 代　古墳時代前期の土師器は、調査区東半部を中心に包含層から小片で出土する傾向が強く、当該期の明確な遺構は少ない。しかし、053SD（C区）や193SD（A区）のような溝状遺構も若干ながら存在する。これらは屈曲部を有しており、周溝墓もしくは低墳丘墓の周溝であ



一色城跡周辺の明治時代地籍図（愛知県公文書館所蔵　中島郡西島村と片原一色村をトレースして合成）



一色城跡の概要

る可能性もあるが、例えば193SDでは、その南西側で当該期のピット（163SP・171SPなど）が比較的まとまってみられることから、集落の東限～北限を区画していた可能性も考えておきたい。

古　　代　古代の遺構は、調査区南東部で検出した。竪穴建物跡などの集落に関わる遺構が大半で、昨年度と同じく7世紀後半～8世紀を中心とする。また上位の包含層からではあるが、知多式製塩土器の脚部も出土している。包含層での須恵器出土は調査区東半部に集中しており、微高地の東～南東側斜面を集落域とする傾向があるとみられる。

中　　世　中世の遺構は、先述の暗褐色系シルトの上から掘り込まれた溝が主な遺構である。この溝は昨年度の調査区でも同様に検出され、東西方向の溝（176SD・181SD・182SD）を基軸に南北方向の溝（061SD・062SD・088SD）が交差している。また溝は直線にはならずに若干湾曲した形状で、何度も掘り返された結果、その底部は複数の小溝が並行する形状（例えば、176SDに対して下部の181SD・182SD）となっている。出土遺物はきわめて少ないが、中世後半にかけて機能していたと考えられる。以上のことから、これらの溝は屋敷地などの区画溝であったと思われる。

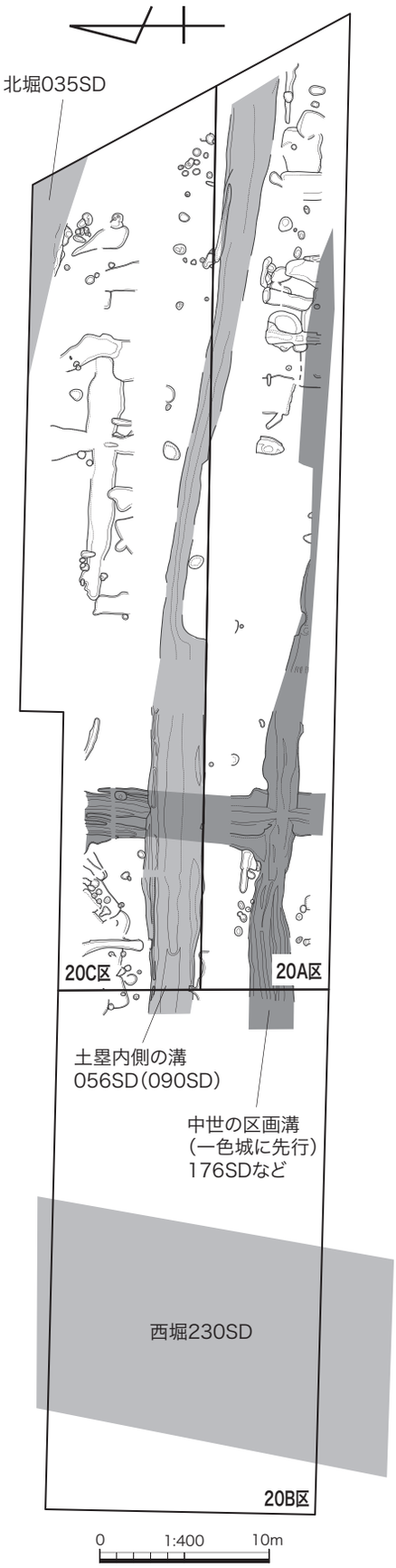
戦国時代　戦国時代、一色城跡に関する遺構は、先述のように削平部分が大きく、堀や溝など掘り込みが深い遺構に限られる。主なものとして、調査区西端に西堀230SDがあり、調査区を東西に貫くようにして溝状遺構056SD（090SD）が挙げられる。

西堀230SDは南北方向からやや東に振れた方位で延びており、昨年度検出された東堀の西側の上端に平行する。そこから230SD東側の上端までの距離は約84mである。230SDの幅は約8mを測り、東堀の幅が約13mであることから、84+8+13=約105mとなり、明治時代の地誌である『片原一色村誌』にあるように東西一丁の城域であったと推測することができる。230SDは上層が埋戻し後の灰褐色粘土で、下層は植物質を多く含む暗灰色粘土である。下層からは大窯期の天目茶碗や土師器煮炊具などが出土している。

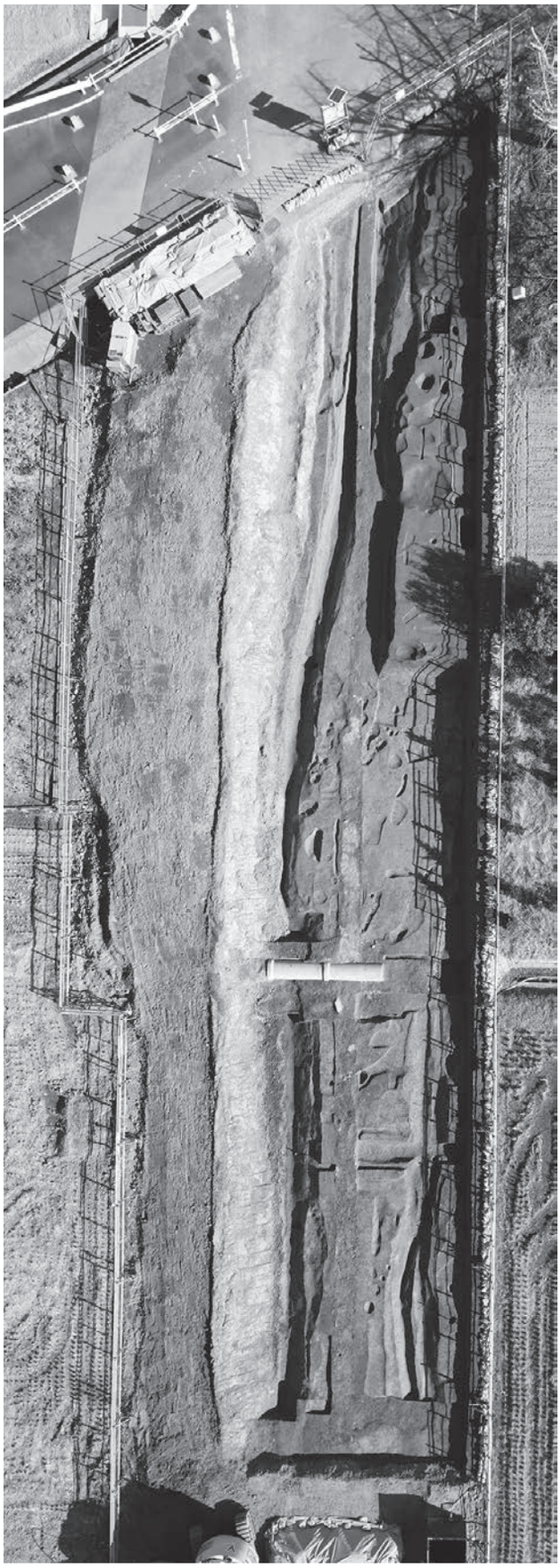
これに対して、東西溝056SD（090SD）は、検出した部分からすると約60m以上の規模で、最大幅約3.6m、深さ約0.8mを測る。ただし深さは削平された部分を加味すると約2mになると想定される。調査区西半部の056SDは断面が逆台形であるのに対し、東半部の090SDは薬研堀に近い断面形となっている。その形状が変化するあたりは撹乱によって不明瞭であるが、少しずつ性格が異なるのかもしれない。056SDからは天目茶碗や木片、090SDからは端反皿や焼けた板材（全長3.6m）、茶臼（下臼）片が出土しており、陶器の年代は概ね16世紀前半代を中心とする。埋土中の焼土や炭化物は、5cm大のブロック状のものが多く、燃やしたものを投棄したのかもしれない。

056SD（090SD）から南側では、中世整地層の上で陶器類や土師器皿が出土する小溝や土坑を検出したが、同溝から北側ではそれがほとんどない。このことから、056SD（090SD）北側には北堀に伴う土塁があったと推測され、056SD(090SD）は、土塁と屋敷地を区画する堀（内堀か）であった可能性がある。

ま と め　以上のように、今年度の調査区では戦国時代の一色城に関わる多数の遺構と遺物を検出することができた。また、それらが廃棄された時期は橋本一巴の活動していた時期に重なり、橋本氏が一色城を拠点にどのような活動をしていたのか、具体的な資料に基づく分析が可能になった。また下層の遺構については、昨年度の成果も合わせて中嶋郡域に分布する古代集落の一つを明らかにすることができた。（永井邦仁）



主要遺構（上面）



20A 区空撮時の状況